

植民地領有の目的 (一)

山本美越乃

植民地領有の目的如何、換言せば植民地の領有は母國に對して如何なる利益を與へ、又植民地自己にとりて如何なる利益を供すべきかの問題は、實に植民的活動の根本要件を構成すべきものなりと雖ども、從來此の種の問題は多くは政治上又は外交上より論議せらるるか、然らずんば極めて漠然たる經濟上の理由を之に附するに過ぎずして、毫も吾人を満足せしむるに足るものなし、(註) 本來の國土以外に於ける一定の地域が政治的又は軍事的に頗る重要な地位を占むるより之を植民地として領有する場合には、之より生ずる有形上の利益の如きは敢て問ふの要なしと雖ども、然らざる場合に漫りに海外に領土を擴張し、之が爲めに却て母國の財政上に過重の負擔を爲さしむるが如きことの可否得失に關しては未だ遽に之を斷す可からざるものあり、此の種の問題は英國の如くに植民地の自治自給を以て原則となし、極めて少數の例外的の場合を除く外は事實上に於ても亦此の主義を實行し得べき富裕なる植民地のみを有せる國に在りては殆んど問題と成すに足らずと雖ども、爾餘の植民國例へば獨逸の如くに植民地維持の爲めに年々巨額の國庫の補助を必要とするが如き國に於ては、植民地領有の利益如何は慎重なる研究を要すべき問題たらざるべからざるなり、政治上又は外交上より植民地領有の必要を論ずるは自ら別箇の問題に屬し寧ろ爲政治家の論域に屬すべきものたり、吾人の茲に論せんとする所は主として經濟上の見地より植

民地領有の目的如何を考察せんとするに在り。

(註) 例へば英國に於ける植民的發展論者中の權威と稱せらるる J. R. Seeley の名著 *The Expansion of England* (Macmillan's Empire Library, p. 56. 以下参照) の如きは之が著例たり。

アダム・スミスは其の著『國富論』中に歐洲近世の植民は古代の希臘・羅馬等の植民の如くに明白なる利害問題を基礎として起れるものに非ず、(中略)亞米利加及西印度に於ける歐洲の植民の如きも必要上より起りたるに非ず、假令之より獲たる利益は頗る大なりしとは謂へ當初は斯かる問題に關しては明白なる觀念を有せず、從て之を動機として植民的の活動を爲したるものに非ずと言へるも、吾人の觀る所は些か之と異なり、凡そ國民が外に向ひて新たに活動を開始せんとするに當りては、必ずや之を誘ふべき特殊の原因なかるべからず、何等の誘因なくして唯漫然植民的の活動に従事せんとするが如きことは、近世に在りては勿論古代及中世に於ても亦殆んど想像し得べからざる所に屬す、而して其の誘因は固より時と所とに應じて必ずしも一樣ならずと雖ども、一般的に之を論ずる時は經濟的利益の獲得若くは其の増進は實に之が最大原因を成せり(註)、スミスの所謂近世の植民事業に先鞭を着けたる西班牙・葡萄牙兩國民の如きも、其の植民的活動の目的を探索せば主として貴金屬の蒐集及香料の輸入に存したることは植民史上に於ける顯著なる事跡にして、ヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)が初めて印度に上陸したる時、『我等は基督敎徒と香料とを求めんが爲めに此處に來る』と言へるは、當時の植民事業の計畫者等の偽らざる告白たり、西班牙・葡萄牙の兩國に次で起れる和蘭の如きも亦通商貿易の擴張を以て植民事業の目的

(1) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, Bk. IV, chap. VII, part I

(2) Egerton, *Origin and Growth of the English Colonies*, p. 24.

となし、更に其の後繼者たる現今の英・佛・獨・米等の諸國の植民的活動の原因に就きて考察するも、孰れも皆經濟的利益の獲得若くは其の増進を植民事業の目的と成さざるはなし、或は文化の普及と云ひ、或は教育及宗教の傳播と云ひ、或は民族の勢力の扶植と云ひ、或は植民的帝國の建設と稱するも、窮極する所は之に依りて母國及植民地の經濟的利益を増進せしめんとするに在ることは疑ふ可からざる所にして、經濟的利益の觀念を離れて近世の植民事業の動機を説明せんとするも這は到底不可能のことに屬す。

(註) エヤートン氏も亦吾人と略同一の見解を有せり、氏曰く“*The motives which prompted the European nations to enter upon the field of colonization were in the main two, viz. the desire to win converts for the Church, and the desire to win wealth for themselves. Unhappily the missionary zeal was soon exhausted..... Meanwhile, colonies, as the outcome of discovery, could only be justified as means to wealth.*” (Egerton, *Origin and Growth of the English Colonies*, pp. 108-109.)

既に經濟的利益の獲得若くは其の増進にして植民的活動の主要なる原因を成せる以上は、植民地の領有に伴ふて當然起るべき問題は、如何にせば其の利益を母國及植民地間に完全に收め得べきかと云ふこと是れなり、而して此の問題に應へんと欲せば植民事業の齎すべき經濟的利益なるものの本質に就きて考察するを捷徑と信ず。

普通の事情の下に在りては植民的活動の齎すべき經濟的利益は、(一)食料及原料生産地の増加、(二)放資範圍の擴張、(三)勞働效程の増進、(四)特殊生産物の供給、(五)通商の利權の確保等の五方面より之を觀察することを得べし。

(一)食料及原料生産地の増加、植民地に於ては通常土地の利用は比較的自由に於て、又到る處に未墾地の殘存せるもの決して少しとせず、是れ蓋し面積に比して人口寡少なるか又は住民遊惰にして富源の開發に留意せざる者多きに因る、故に斯かる未墾地を整理して其の富源を開拓すると共に此處に食料及原料の生産地を求むることは、母國及植民地の利益を増進せしむべき第一歩たり、嘗て武裝的平和論(The argument of armed peace)の主張せられたる時代に於ては、假令自然なる獎勵方法に依るも尙ほ國內に於ける各種の産業を保護し助成せしむるに非ずんば、一朝有事の日に國家の獨立自衛の目的を達すること能はざるべしとの説行はれ、斯かる觀點より食料及原料の自給策を講せんが爲めに植民地領有の必要を力説したるもの尠からず、然れども此の如きは未だ以て植民地領有の眞目的を闡明したるものと稱するを得ざるなり、吾人の所謂植民地領有の目的とは斯かる涉外的の關係換言せば國際的紛争の場合を顧慮するより出でたるものに非ずして、全く母國人口の増加に伴ふ食料の缺乏及其の産業的發展に必要缺く可からざる原料の供給を潤澤ならしめんとする點に在り。

由來植民地は其の性質上二次的産業即ち製造工業等の發達に關しては多大の期望を囑すること能はずと雖ども、原始的産業殊に食料及原料の生産に就きては諸種の便宜を有し、最少の勞費を以て最大の報酬を收め得べき自然的の好條件を具備せるもの多きが故に、之が開發は奮に母國に經濟上の利益と援助とを與ふるのみならず、植民地自己にとりても亦未開の富源の開拓に因り、直接間接に住民の利益を増進せしむること決して鮮少なりとせざるなり 註、蓋し植民地に於け

る土地の利用は之を自然の狀態に放任する時は、自家日常の需要を充たす以外に何等の慾望を有せざる住民に依りて、最も容易に收穫し得べき食料品生産の用に供せらるるに過ぎずして、一般に土地の利用は極めて不經濟的たるを免れずと雖ども、母國民の協力の下に其の利用方法を講ずる時は、氣候及土壤等の差異に應じて生産物の種類を多種多様ならしむることを得、又從來の單純耕作法に代ゆるに複雑耕作法を以てする等土地及勞力の經濟的利用を完からしめ、從て之より生ずる利益を完全に收め得べきを以てなり。

(註) "For many years the course of industrial development in the colonies was quite simple. They were free to devote themselves to what is known as the agricultural phase of industrial life, the raising of the raw materials required for human needs and comforts. Tropical and sub-tropical colonies found ample market for their special products among the European nations, who learned new wants as these supplies opened out..... In the colonies Nature offered so liberally and so easily, the first-hand produce of her soil that it would have been almost perverse to have turned to the secondary processes."⁽¹⁾

現今各國は一方に於ては自國の生産品に對する市場の擴張に全力を傾注すると共に、又他方に於ては自國に缺乏せる食料及原料の確實なる供給地を得んことに苦心しつつあるも、是等の冀望は少くとも其の一半は植民地の領有に依りて之を達し得べく(註)、植民地自己にとりても亦母國と協力提携することに依りて初めて孤立的の一小經濟單位たる地位を脱し、母國と共通的一經濟團體として其の地位を安固ならしむることを得べし、此の如くにして初めて印度及埃及は安全なる棉花の生産地たるを得べく、瓜哇及西印度諸島は有利なる甘蔗の栽培地たるを得べく、濠洲

(1) Caldecott, A. English Colonization and Empire, pp. 170-171.

は卓越せる羊毛の供給地たるを得べく、印度支那地方は米穀の無限の寶庫たるを得べし、更に又之を他面より觀察するも食料又は原料を常に他國を仰がざる可からざる國は、然らざる國に比して往々貨物の生産費を嵩加せしめ、從て自國の生産品に對する市場の擴張の如きは此の點より測らざる制限を受くるに至ることなしとせず、又假令斯かる制限を受くることなしとするも、少くとも食料及原料を自國の領土内に産する國に比較する時は、之が爲めに正貨の流出を頻繁ならしめ延て一般物價及賃金上にも其の影響を及ぼすに至るの危険あり、是れ吾人が渉外的の關係を離れ單に母國對植民地間の問題として之を考察するも、植民地の領有は相互の經濟的利益の増進に與かりて大に力ありとなす所以なり。

(註) "The chief advantages of colonization to the mother country (economically speaking) are twofold : the opening of new sources of production, whence articles of necessity, conveniences, and luxury may be obtained more cheaply or more abundantly than heretofore, from the unexhausted resources of a new soil; the opening new markets for the disposal of the commodities of the mother country, more profitable and more rapidly extending than those previously resorted to, by reason of the speedy growth of wealth in new communities."

(二) 放資範圍の擴張、凡そ國富の増加は其の半面に於ては資本の潤澤從て金利の低落を意味するが故に、國富み資本豊かなる時は常に國內産業の發達を促し通商貿易の擴張を助くるのみならず、更に低利の資本を國外の有望なる事業に投じて其の利殖を計らんとするの傾向を生ずるに至るとは蓋し自然の勢と言はざる可からず、然れども斯かる場合に際して其の放資地の選擇は最も攻究を要すべき問題にして、單に未開の富源を藏し之が開發に必要な資本の缺乏を感ずるより外

(1) Merivale, H. Lectures on Colonization and Colonies, p. 187.

資の輸入を歓迎し、高率の利子を支拂ひ得べき事情あるのみにては未だ以て適當なる放資地と稱するを得ず、資本の需要大なると共に之が回收及利子の支拂に對して安全なる保證の存するに非ずんば安んじて其の資本を放下し能はざるや明かにして、放資の有利と安全とは實に放資地の決定に際して慎重なる考慮を要すべき根本問題たり。

而して放資の有利は未開の富源に富み之が開發に資本を要すること頗る急なる地方に於ては殆んど例外なく之を期待し得べしと雖ども、其の安全に至りては全く文物制度を異にし放資國と何等の關係を有せざる地方に對する資本の放下は、政治上若くば經濟上密接の利害關係を有せる地方に對する資本の放下と其の度に於て著しき差異あることを認めずんばあるべからず、殊に同一統治權の下に立ち放資國と從屬的の關係を有するが如き地方に於ては、假令風俗・習慣・言語等を異にするも資本家は放資上諸種の便宜を得、其の放資をして最も安全且つ有利ならしむることを得べし、然かも斯かる場合に放資の利益は獨り放資國のみ之を享有するものに非ずして、之が爲めに放資地の幼稚なる産業を發達せしめ、其の住民に新たなる職業を與へ、彼等の收入の増加と共に徐々に生活程度を向上せしめ、延て文化的生活に入るの準備を爲さしむることを得る等、放資地の享くる利益も亦決して尠しとせざるなり、果して然りとせば國富の増加に伴ひ餘りある資本を最も安全有利に放下せんことに苦心しつつある國は、未開の富源を藏すると共に資本の缺乏を感ずる植民地の領有に依りて初めて其の目的を達することを得べく、斯くして植民地の領有は母國の放資範圍を擴張せしめ、母國に利益を供すると共に又植民地自らも其の利益に浴するもの

を言ふを得べきなり。

(註) 植民地には未開の富源少からざるも之が開發に必要な資本に乏しが故に、母國の餘りある資本を有利に放下し得べき事業多く、又假令現在は然らざるも將來然るべき見込を以て資本の流入を誘ふ機會甚だ多し、マーシヤル氏の如きも此の點に關して論じて曰く“Englishmen and others, who have accumulated the means of present enjoyment, hasten to barter them for larger promises in the future than they can get at home: a vast stream of capital flows to the new country, and its arrival there raises the rate of wages very high. The new capital filters but slowly towards the outlying districts: it is so scarce there, and there are so many persons eager to have it, that it often commands for along time two per cent. a month, from which it falls by gradual stages down to six or perhaps even five per cent. a year.”⁽¹⁾

植民地の領有は此の如く母國の放資範圍を擴張せしめ、母國及植民地に對して直接利益を與ふるのみならず、資本放下の結果植民地に於ける各種の事業の勃興は徐々に母國に對する植民地住民の信頼の念を高めしめ、延て其の統治上に少からざる好果を齎し得べき利あり、蓋し植民地の如き文化の程度の劣れる地方の住民に對する最も有效なる指導方法は、文明的の諸般の施設を斷えず眼前に提供して所謂實物開示の方法に依り成るべく速かに母國の文化を理解せしめんことに努むるに在り、斯くして最初は物質的の方面より彼等の智能を啓發し漸次其の心意的方面に及ぶ時は、比較的勞少くして統治の實績を收むることを得べし、此の主旨より論ずるも植民地の有望なる事業に資本を放下することは極めて緊要にして、這是放資の齎す間接の利益に過ぎずと雖ども植民政策上に於ては看過す可からざる重大なる事項たり。

(1) Marshall, A. Principles of Economics (sixth ed.), p. 669.